事業の評価

それぞれの指標１～４に基づいて、次のようなことが明らかとなった。

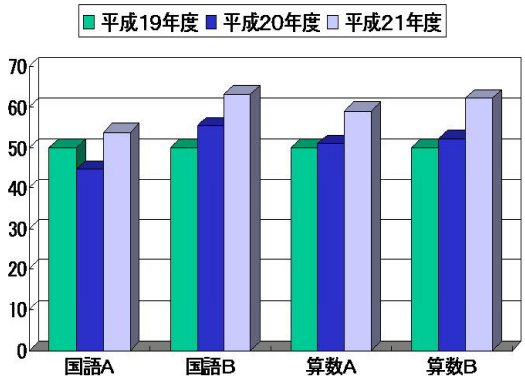
指標１　学力の向上
平成21年度全国学力・学習状況調査を平成21年度中に再度実施。
・無解答率の高かった問題の改善
・平均正答率を４月の結果と比較
過去３年間の経年比較。

推進校では、校内体制の整備、教員研修・授業研究による教員の指導力向上、始業前の朝学習、習熟度別少人数学習等、それぞれの実態に応じて、学力の向上を図っている。

その結果、平群西小学校では、過去３年間の全国学力・学習状況調査の教科に関する調査結果を経年比較してみると国語Ａを除いて年々上昇してきていることが分かる。（資料１）また、同校では教科に関する調査を平成22年２月に再度行ったところ、国語Ｂの問題で無解答率が30％から８％に22ポイント改善されていることが明らかとなった。

さらに、御所中学校でも同様に、平成22年２月に再度行ったところ、標準化得点に換算して下の表（資料２）のように改善が図られている。その割合はわずかのものもあるが、特筆すべきことは、無解答者数が０になっていることである。

過去３年間の平均正答率の比較（平成19年度の結果を50とする）



資料１

【４月に実施された全国学力・学習状況調査の再テスト結果】

	国	数
２月実施	Ａ：＋4	Ａ：＋6
	Ｂ：＋1	Ｂ：＋2
無解答者数	0	0

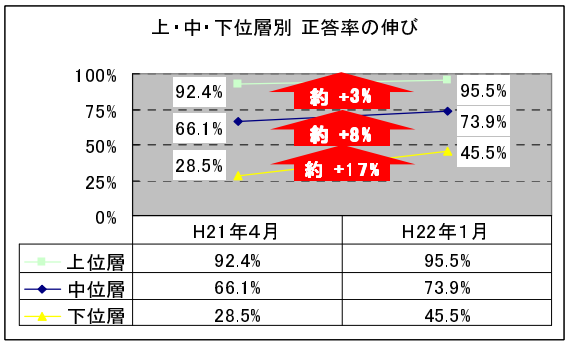
資料２

※表記した数値は４月の全国学力テストを基準点（±０）として正答率のポイント 差の上下を示している。

さらに曽爾中学校においては、平成21年４月に実施した全国学力･学習状況調査で課題が見られた「数学Ａ」を平成22年１月に再度行ったところ

①平均正答率が、９．７ポイント増加。

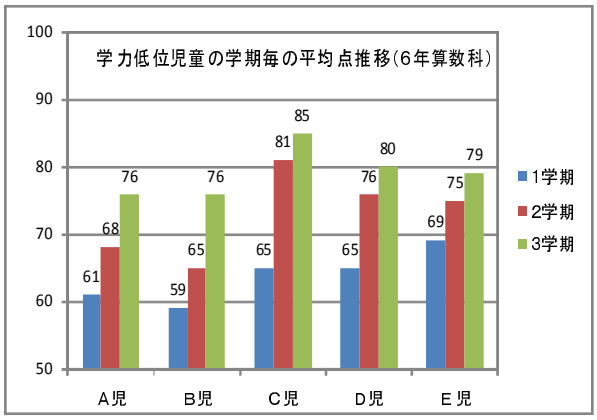
②４月の正答率をもとに上位層・中位層・下位層に分け、１月の正答率の伸びを見



資料３

ると、上位層は３ポイントの伸びにとどまったが、下位層は17ポイントの伸びとなった。中位層の伸びはその中間（８ポイント）であった。（資料３）

掖上小学校でも、下位層の児童に取組の成果が顕著に表れたという結果が見える。（資料４）



資料４

いずれの学校にも共通しているのは、繰り返し学習や補充学習等で分からないことを残さない取組であり、学習習慣を確立し、基礎を培う取組であった。このような基礎学力を確かなものにする取組が全体の正答率を高めることにつながったと考えられる。

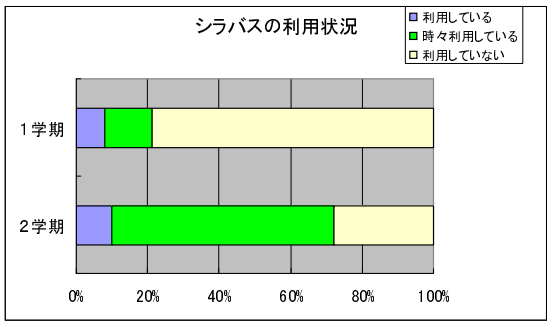
なお、推進校のうち小学校においては県小学校教科等研究会の国語部会、算数部会が作成している学力診断テストも活用し、経年比較をしたり、同一学年を追跡調査したりして、多様な分析を行っている。それによると、いずれの学校においても改善が図られており、有効な指標となっている。

（指標２）学習意欲

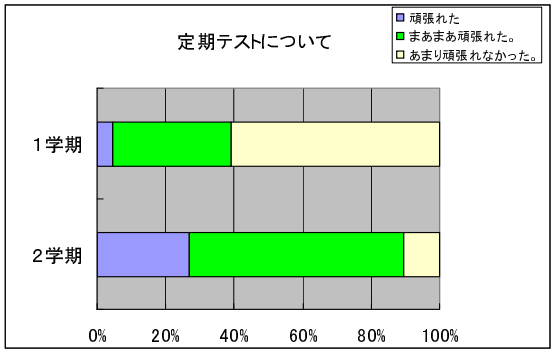
・「教科の学習が好き」と考える児童生徒の割合と「教科の学習が大切」と考える児童生徒の割合の差を比較

本県では過去３回の全国学力・学習状況調査において「教科の学習は好きですか」の質問に肯定的に回答した児童生徒の割合と「教科の学習は大切だと思いますか」に肯定的に回答した割合との差が大きく、学習意欲の向上は、大きな課題である。

そこで、各推進校では、学習意欲をいかに高めるかを中心に取り組んできた。



資料５



資料６

例えば、御所中学校では、シラバスを示すことによってこれから先の学びの見通しをもたせた。２学期にシラバスの利用状況が飛躍的に高まっており（資料５）、定期テストに取り組む姿勢も、肯定的にとらえている生徒が非常に増えている（資料６）。学習に見通しをもたせることとが意欲の向上に結び付いたと考えられる。計画的に学習すれば「目標は達成できる」という意識も生んだのだとも考えることができる。

また、曽爾中学校においては、４月の全国学力・学習状況調査において、「数学の勉強は好きですか」の項目に肯定的に答えた生徒は約３割、「数学の勉強は大切だと思います

か」の項目に肯定的に答えた生徒は約８割で、その差が50ポイントもあった。再度翌２月に調査したところ、「数学の勉強は好きですか」の項目に肯定的に答えた生徒が約５割に増え、差が20ポイント以上縮まった。学力向上合宿（ＧＵＴＳ）をはじめ、月６タイムなど小規模少人数の学校の特長を生かした取組が、この成果に結び付いたと考えられる。

さらに、平群西小学校でも、国語・算数それぞれの学習を「好きだ」と感じている児童の割合と「大切だ」と思っている児童の割合は、算数について「大切である」と回答した児童の割合が下がってはいるものの、「好きだ」と回答している児童の割合は、飛躍的な伸びを示している（資料７）。また、すべての教科に関する調査において、平均正答数が２ポイント増加しており、意欲の向上と学力の伸びには関連が見られることがうかがえる。

	４月	１月
国語が「好き」	47.8	66.7
「大切」	95.7	100.0
算数が「好き」	50.9	76.2
「大切」	100.0	87.0

資料７

（指標３）基本的生活習慣、規範意識

・学校に持って行くものを、前日かその日の朝に確かめていますか
・家で学校の宿題をしていますか
・学校のきまりを守っていますか
　などの質問に肯定的に解答する児童生徒の割合の比較

基本的生活習慣・規範意識の向上

学習習慣を含めた基本的生活習慣の確立、規範意識の醸成などは、過去３年間の全国学力・学習状況調査の結果から見られる、本県の児童生徒の課題の一つであった。推進校においては、特にこの点に大きな課題が見られ、学習の定着や意欲に大きな影響を与えていることは否めなかった。

そこで、いずれの推進校においても家庭と連携を図りながら基本的生活習慣を確立する取組を行っている。

		小　学　校		中　学　校	
学校に持って行くものを、前日かその日の朝に確かめていますか	県 全国	83.5 85.3	掖上小　75.0→79.8 大正小　58.0→68.0 平群西小78.3→78.3	79.4 84.3	御所中75.0→79.8
家で学校の宿題をしていますか	県 全国	95.7 95.2	掖上小　75.0→79.8 大正小　71.0→70.0 平群西小95.7→90.5	77.5 81.4	御所中75.0→79.8
学校のきまりを守っていますか	県 全国	82.9 86.3	掖上小　75.0→79.8 大正小　70.0→74.0 平群西小86.9→81.0	82.8 86.4	御所中75.0→79.8

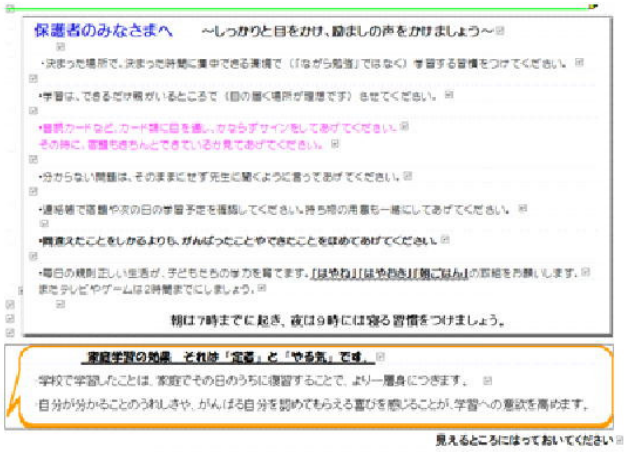
資料８

その結果、資料８のような結果が見られた。多くの点で改善が図られ、ほぼすべての質問について肯定的に回答した割合が増加している。しかし、全国平均と比較して上回った

ものは少なく、継続的な取組が必要である。

（指標４）家庭での取組
年度当初と年度末の２回、保護者に対し調査を行い、比較、検証する。

推進校では、（指標３）とも関連して、家庭への働きかけを積極的に行った。特に３校の小学校において、積極的な取組が見られた。県教育委員会では、基本的生活習慣の確立とともに、家庭学習の早期の定着を啓発するリーフレットを小学１・２年生向けに作成したが、いずれの小学校においても、家庭訪問やＰＴＡ総会、学級懇談会などの機会を活用して配布し、直接保護者に伝えた。また、県教育委員会では推進校とも協働し、ショッピングモールでワークショップを開催し、より多くの保護者に啓発した。また、大正小学校では、児童の実態に基づいて「携帯電話に潜む危険性」というテーマで教育講演会を開催し、啓発を行っている。



資料９

さらに、家庭で何をどのように取り組めばよいのかが分かるように、例えば掖上小学校では「家庭学習の手引き」の中に「保護者の皆さまへ」として、具体的な手立てを示すなどして、保護者への働きかけを行っている。（資料９）

こうして、学校だけでなく、保護者、地域と共に取り組んでいこうという意識が高まってきているが、継続した取組が必要である。

以上、成果指標から本事業を振り返った。

「学びへの意欲を高める」というテーマのもと、各推進校の取組ではそれぞれの実態に応じた取組によって改善が図られている。

推進校の多くでは基礎・基本の定着に主眼を置いて、繰り返し学習や習熟度別少人数学習、問題作成データベースの活用など児童生徒に対する指導方法や授業形態の工夫を行っている。さらに、教員自らが授業公開を行ったり、模擬授業を行ったりすることで指導力の向上に努めていることが分かる。

学校質問紙の結果によると、本県では講師を招いての研修は盛んに行われているが、授業公開などは全国平均を下回っている。推進校においては授業研究が盛んに行われており、教員自身の指導力の向上が意欲の向上に寄与していることが明らかとなった。

しかし、基本的生活習慣の確立、学習習慣の定着、規範意識の醸成といった本県の児童生徒に見られる大きな課題については、まだまだ改善の途中である。保護者や地域との連携を図った継続的な取組が必要である。